

二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版



小説 上田ながの

挿絵 影原半蔵

其ノ一	復讐の少女	006
其ノ二	屈辱の夕餼 <small>ゆうげ</small>	037
其ノ三	淫虐の行軍、地獄の決戦	060
其ノ四	凰花散る	102
其ノ五	決闘、そして……	136
其ノ六	淫獄処刑	178
其ノ七	最後の裏切り	211

## 登場人物紹介

Characters



くりゅうおうか  
**九流凰花**

緋色の鎧に身を包む男装の姫武者。両親の復讐のため、仇である大名の軍に潜入している。根が明るい性格のため友人も多く、仲間から信頼されている。

あかぬまだんじょうちゅうひさなが  
**赤沼弾正忠久永**

凰花の両親の仇である大名。通称血塗れ弾正。天下を狙える勢力を持つが、狭量な人物であり、嫉妬深い。

あかぬまじゅうべえよしはる  
**赤沼十兵衛義晴**

弾正の息子で、凰花が特に親しくしている友人でもある。彼の存在ゆえに、凰花は仇討ちを迷うこともある。

あさひなげんざぶろう  
**朝比奈源三郎**

凰花と同じ隊に所属する、有力武将の息子。嫉妬深い人物で、ひょんなことから凰花が女であることを知る。

馬鹿にするような男達の態度に、思わず声を張り上げながら、少女は氣を引き締める。

(一時、一時の恥だ。私は武門の、九流家の娘だぞ。この程度で臆してどうする！)

何度も自身を叱咤し、遂に胸元を開けた。晒しが露になる。何重にも胸に巻きつけた布。乳房は押し潰されていた。質量のある乳肉が擦れ合い、蒸れているのか玉の汗が浮かんでいる。白い肌は僅かに桜色に染まり、健康的な色氣を放つ。

男達は股間を押さえながら、おおっと歓声を上げた。

「おいおい、随分苦しうだなあ。おいほら、さっさとそいつを外せ。いいか、両手で隠したりするなよ！」

はあはあと男達の息も荒くなっている。自らの腰を押さえ空腰を振り、舌舐りする姿は、獣と何ら変わらない。

そんな彼らの言葉は無視し、揺れる心を何とか平常に押し止めながら、布を解いていく。徐々に開放されていく乳房。白い肌が露になるにつれ、男達の瞳が爛々と輝いていった。

柔肉は今まで晒しに潰され、ひしゃげていたとはとても思えない。布から解き放たれた途端、むっちりとした美しい形を作り出す。開放された凰花の胸は、小さ過ぎず、大き過ぎず、理想的な形。ツンと僅かに向上き加減、桃色の乳頭が見る者の視線を惹きつける。剥き出しの上半身に、籠手や佩楯を身に着けたままの姿は、一種異様な光景だった。

(大丈夫だ。何の問題もない)

両親を殺された屈辱を思えば、この程度の恥辱はあつてないようなもの。

そのように頭の中では考えているのだが、視線を意識すると全身が熱くなってしまう。じんわりと肌から汗が噴き出す。どうしても意識してしまう視線。それを誤魔化すように、下半身を剥き出しにした源三郎を鋭い視線で睨みつける。

「いいぞ。ああ、乳房がムチムチ震えているぞ。本当に女なんだな。くく、しゃぶりつきたくなるぜ。よし、じゃあそのままの状態で、早速俺のモノを舐めてもらおうか」

などと言いながら、源三郎が何かを風花に向かって投げつけてきた。反射的に受け取ったそれは、夕餉用の椀。

「何だこれは？」

「なあに、後で分かるさ。そんなことより」

腰を突き出してくる。あまりに露骨な態度に、風花はきつく唇を噛み締めながら、それでも源三郎の前に跪く。眼前に肉棒。皮を被っている。先端の余った皮の間から覗く龟头には、恥垢が貼りついていていた。異様な臭気に、思わず「臭い」と呟いてしまう。

(こ、こんなモノを舐めろというのか……)

「どうした？ 早くしろよ。それともやっぱできないのか？」

源三郎に容赦はない。少女が嫌がっていることを楽しんでる。周りの男達も、周囲で股間を押さえながら笑う。

「やるさ。この程度……、何の、何の問題もない」

自分より数段腕が劣る者に馬鹿にされるのが悔しい。それを悟られることすら、耐え難

い。強がりをお口に出し、男根の先端へ震える唇を近づけていく。

(十兵衛様)

この時脳裏に浮かんだのは、父でも母でもなく、何故か十兵衛の悲しそうな笑顔だった。  
ちゅぷつ。

伸ばした舌先が、肉表に触れる。伝わってくる皮の感触。内部の恥垢によって、所々が盛り上がっているのが分かってしまう。熱気は冷めた汁のよう。あまり味は感じない。ただ、生々しい感触が気色悪さを増大させる。

「よし、いいぞ。そのまま表面を舌でなぞるんだ」

圧倒的実力差を持つ少女を屈服させている現実が、源三郎を興奮させているようだった。彼は熱に浮かされたように、指示を出してくる。

「ん、んんん……ん」

従うしかない凰花は、指示されるがままに舌を動かそうとした。亀頭部に震える舌を這わす。舐めろという命令に答えようとするのだが、肉棒に対してどこか恐怖を覚えてしまう。舌で肉表を撫でるたび、凰花の身体までビクビク震えた。それでも唾液は剛直に絡みつき、夕闇の中だというのに肉棒はヌラヌラと怪しく輝く。

吐き気を催させる匂いに耐えながらの行動。あまりの屈辱に涙が溢れそうになるが、少女の心に残った矜持はそれを許さない。父と母が殺された日に、復讐を果たすまでは泣かないと誓った。だから涙を耐え続ける。

「駄目だなあ。全然駄目だ」

源三郎は一言のもとに風花の努力を切つて捨てた。その顔には不満が浮かぶ。

「な……はあはあ……何が不満だ」

這わせていた舌を離し、男を睨みつける。肉棒と舌の間に、唾液の糸が伸びた。

「ながつてさあ、分かつてくれよ。皮の上から舐められてるだけじゃ、全然気持ちよくないんだよ。分かるか？ ああっ!」

無駄に凄む男。具体的な命令は何もない。それでも彼が言いたいことは大抵理解できた。理解できてしまった。

ゴクリと唾を飲み、瞳に殺気を込めたまま頷く。そして再び男根に舌を伸ばし——包皮の中へと舌を入れた。

くち、ちゅちゅ……。

「ん、くう……に、苦いっ!」

皮の間から覗き見えた先端の亀裂に舌が触れた途端、味覚を痺れさせるほどの苦味が伝わってきた。眉根が寄る。本能的に肉棒から顔を離そうとしてしまう。しかし源三郎の腕が風花の頭を押さえ、逃げることを許してくれない。

「苦いじゃないだろ。ほら、自分の仕事をしろよ。軍に残りたいんだろ?」

愉悦を含んだ冷酷な言葉だったが、現実を突きつけてくる。こんなことを言われれば、頷くしかない。

ぺちゅ、くちゅくちゅ、ちゅくう。

亀裂を穿るように動かす舌。恥垢が剥がれ、舌先に絡みつく。やがて鈴口から、透明な汁が分泌され始めた。舌に感じる不潔な匂いと不潔な味が、全身を侵食していくような錯覚すら感じさせる。

「まだまだだ。舐めるだけではまったく足りないな」

源三郎は一言言い放つと、唐突に腰を突き出してきた。

じゅぽおっ！

「ん、くもおっ！」

舌を伸ばしたままの状態で、肉棒の動きを止めることはできない。突き出された剛直は唇を割り、口腔へと侵入してきた。

「お、い、いいぞ！ お前の舌遣い、俺のモノに絡みついて堪らんぞ！」

「こ、おもっ、んもおっ！」

息が詰まる。目の前が一瞬真っ白になった。

（口の中に！ こんな不潔なものが私の！）

口腔いっぱい、例の匂いが広がってくる。胸奥に広がる甘酸っぱい嘔吐感。慌てて風花は男の腰に手を当てると、何とか男根から頭を離そうともがく。僅かな時間であったとしても、こんな状態には耐えられない。

だが本能に塗れた男は、一時の容赦も与えてはくれなかった。



「んぶっ！ こっ！ おっおっ！ と、とまつれ！ お、おぼっ！」

ジュボッジュボッと鳴り響く激しい音。源三郎が無理矢理腰を振り始めたのである。

喉奥まで突き込まれた肉棒が引き抜かれていく。外側に捲れ上がる唇。分泌された唾液が口端から流れ、風花の顔を汚す。

これで解放されるのか、という安堵感が一瞬生まれるのだが、男に慈悲の心は存在せず、再び抜かれた剛直が突き込まれた。

「やむえろお！」

口腔を蹂躪しようとする男根を、舌を伸ばして止めようとする。カリ首に舌を絡め、締め上げていく。それが男を喜ばせる結果になることも分からずに。

「お前の舌は柔らかいなあ。そんなに締めつけるなよ。くく、お前もやる気になっているじゃないか。よし、もつと奥まで突っ込んでやる！」

源三郎が歓喜の声を上げ、喉奥まで腰を突き出す。カリ首に絡みつけた舌が、肉棒の突き出しに圧迫された。ずるずると舌肌が肉茎を擦っていく。舌先が肉筋をなぞるたび、肉胴は痙攣した。ポロポロと恥垢が剥がれ落ち、口の中が痺れる。

「んっんっんっんっ！」

何度も繰り返される腰の前後運動。風花の小さな頭が、玩具のように弄ばれる。

それでも少女は、自身を叱咤し続けていた。父と母の無念と、弾正に対する憎悪を燃え上がらせる。復讐心だけで、与えられる屈辱を乗り切り切ろうとしていた。

(なにつ！ お、大きくなってる！)

そんな中で肉棒の変化に気がつく。口腔を蹂躪する陵辱棒が、一突きごとに大きさを増していた。亀頭が膨張し、鈴口から分泌される汁も白濁混じりになる。精臭もより強いものとなり、凰花の思考を麻痺させた。

匂いを嗅いでいると、何故か全身が熱くなる気がする。特に下半身。佩楯と袴の下、誰にも見せたことのない秘部が、今まで感じたこともないほど、熱く潤う。

(なんだこれ？ どうなってるの？)

自分の身体の変化が持つ意味が分からない。戦が終わった後に感じる高揚感にも似ている感覚だった。

知らず知らずのうちに昂ぶる肉体。露にされた肌にも、その変化は現れる。

じゅぶつ、じゅぶつ、じゅぶつ！

「んふつ、くるっし！」

男根が前後運動するごとに揺れる乳房の先端では、豆のような乳首が勃起しつつあった。乳肌からは汗が噴き出し、夜の闇の中でも妖しく輝く。胸元では顎から垂れ流れる唾液に、次から次へと分泌される汗が混ざる。香り立つのは甘酸っぱい少女の体臭。

「げ、源三郎様。お、俺達も我慢できません！」

花開く少女の色気に、見物していた彦一と彦次の顔色が変わった。いつの間にか、彼らも肉棒を露にしている。奉仕を受けたわけでもないというのに、先端からは先走り汁が分

泌されていた。

「おおそうか、悪かったな。すっかり俺だけ楽しんじまって。よし、それじゃあお前らもこっちに來い」

源三郎は簡単に部下を呼ぶ。

(こ、これ以上は！)

近づいてくる二本の肉棒が恐ろしい。視線で威嚇しても、男達は止まらない。遂には男根を啜えさせられたままの眼前に、彼らの剛直まで突きつけられてしまった。

「俺達のモノはそれほど馬鹿でかいものじゃない。だからさ、二本くらいは同時に啜えられるだろ？」

源三郎の恐ろしい宣言。

(大きくない？ これで？)

確かに彼らの肉棒は、平均よりもかなり小さなもの。ただ、勃起を見たことがなかった風花には、それでも十分凶器となり得る。一本啜えるだけでも心が軋むほど苦しいのだ。

「む、り！」

だから必死に首を振る。強い意思が輝いていた瞳に、恐怖の色が僅かに浮かぶ。

「駄目だ。よし彦次。お前は口だ。彦一は胸で遊べ」

男達は冷酷だった。彦一は不満そうな表情を浮かべながらも、背後から覆いかぶさるように胸に手を伸ばす。彦次は喜び、風花の口端を指で掴んで無理矢理広げると、既に肉棒

を啜えている口腔に肉棒を挿入してきた。二本の肉棒での口腔陵辱が始まる。

ぐち、ぐじりい……。めりめりい……。

「んが、んががががっ！」

顎が軋む音がした。苦しみで瞳が見開かれる。唇は上下左右に伸び、今にも引き裂かれそうだった。風花の顔が醜く歪む。男達はそんな顔を見て笑う。

「おど、おどごど」

言葉にならない言葉を発し、二人を睨む。

「ほら、啜えられたじゃないか。これなら大丈夫だ。さあ、楽しませてもらうぞ」

「ちんこ同士が擦れ合って、何だか気持ち悪いっすね」

「二人だけで楽しまないで下さいよ。ま、こっちの触り心地も最高ですが」

口々に勝手な事を口走りながら、彼らは腰の前後運動を始めた。彦一も片手で自身の肉棒を抜きながら、胸に触れた指を動かし始める。まるで乳でも搾るかのように、乳根に指を食い込ませてきた。

じゅぽろおっ！

「んぐっ！ んぐううううっ！」

一斉に動き出す二本の肉棒。風花に顎が外れそうなほどの苦しみを与えながら、口腔を蹂躪していく。

どっしりとした重量感を与えつつ、口腔粘膜を擦り、肉茸を喉頭蓋のどぶたに押し当てる。舌は

剛直に揉み解され、感覚がなくなっていく。扱かれる頬粘膜。口腔粘膜の感触を肉棒で感じるたび、肉棒は喜びに打ち震えた。鈴口から漏れ出る先走り汁と混ざり合うたび、ぐちぐちと湿った音が響く。一本が引き抜かれていったかと思うと、一本が突き込まれる。「どまつで、どまつでえええっ！」

唾え込んだまま上げる、悲痛な悲鳴。男根はそれを嘲笑うかのように蠢き続け、膨れ上がっていく。動きを潤滑にする為か、自然と分泌され続ける唾液。溺れそうなほどの量に、コクコク喉を動かして飲むのだが、同時に恥垢まで飲み干すことになってしまう。体内まで汚されているようだった。小刻みに震える全身。それは屈辱の為。

「すげえ形が変わるぞ！」

揉みしだかれる胸は、簡単に形を変えていく。彦一の指が乳首を乳肉の中へと押し込む。乳頭は柔肉へと簡単に埋まり、指が離されると外へ飛び出た。ピリピリと痺れるような感覚が全身に走る。まるで遊女のような扱いに、心を押し潰しそうなほどの悔しさが広がっていく。揉まれるたびに、甘い痺れを感じてしまう肉体が憎い。

じゅごっ、じゅごっ、じゅごっ！

「おえっ、おえええっ！」

肉棒は止まらない。龟头はパンパンに膨れ上がり、時折痙攣を繰り返す。肉胴から発せられる熱も上がっていた。知識がない凰花には、その変化の意味が分からない。ただ、何が起ころうとしていることだけは、何となく理解できた。

「んおっ、むふ、ふおもお！」

肉棒の変化に感じる恐ろしさに頭を離そうとする。しかし、男達は逃亡を許さない。彼らは頭を腕で押さえつけると、これまで以上の速さで腰を動かしてきた。まるで喉を刺し貫くかのような勢い。口腔粘膜で締め上げられるたび、男達は快楽に表情をだらしなく崩す。

「よしっ！ いいぞ、そろそろだ！ イクぞ！」

「おっおっおっおっおっ！」

突き込み速度が上がり――。

どびゅっ！ どっびゅどっびゅどっびゅ、どっびゅるるるううううっ！

大量の白濁液が少女の口腔に射精された。

「んぐ、んぐぐぐぐ、んんんっ！」

吐き出された牡汁は一瞬で小さな口腔を満たす。入りきらない分が、口端から垂れ流れた。プピッと鼻の穴からも噴き出す。生臭く、思考能力を保てないほど苦い熱液。

「お、俺もだ！」

胸を弄んでいた彦一が立ち上がり、顔に向かって白濁液を飛ばしてきた。ねっとりとした粘着液が、べたべたと額や頬に密着する。髪にまで染み込み、前髪が額に貼りついてしまう。不快過ぎる感触。

（なんだ？ 何だこれ？ 何だこれえ!?)



突然隣で馬を歩かせていた同僚が、パンツと凰花の肩を叩いたのはその時だった。  
じゅぶるっ！

「ほおっ、ひいっ！」

薬の効果で全身が敏感になっている。当世袖の上からであっても、刺激は全身を駆け巡り、淫欲の快楽を与えてきた。思わず顔が天へ向き、白い喉元が晒されてしまう。

そのような反応には、肩を叩いた同僚が目を丸くした。

「ど、どうしたんだよ？ 大丈夫か？」

彼は凰花の正体など知らない。だから彼女が現在受けている陵辱にも、気付く筈がない。

その言葉は、純粹に少女を心配してのものである。

「体調が悪いのか？ 若を呼んだほうがいいか？」

歳は四十近いだろうか？ まるで親と子ほども年齢が離れている。だからこそ、彼としても心配なのかも知れない。こんなに仲間に見られるというのは、普段であれば喜ぶべきことだった。

だが今の状態では、それが辛い。心配されればされるほど、仲間を裏切っているという思いを強くさせられてしまう。それに下手に心配され、正体がばれることが恐ろしい。

「な、な……む、ふくううう」

なんでもないと答えようとしたが、言葉にならなかった。

（駄目だ。こ、声は出せない！）



嬌声を止められる自信がない。だから必死に首だけを左右に振る。今の状況ではあまり人と関わりたくない。私は大丈夫だと、無理矢理余裕の表情を浮かべようとす。が、潤んだ瞳に、ヒクヒクと動く眉根の為、とても大丈夫な表情には見えなかった。

同僚はそんな彼女に訝しむような表情を浮かべ、首を傾げながらも視線を外す。  
(わ、分かってくれたか)

風花はホツとし、息を吐く。しかし、完全に危機が去ったわけではない。ただでさえ張り型によって刺激を与えられている下腹部から、新たな感覚が生まれ始めていた。

いつの間にか天気が崩れ、雨が降り出す。行軍には辛い。それでも軍列は乱れることなく、進み続ける。雨の中でも体液は溢れ続け、鞍は雨以外の液体でぐしょぐしょに濡れそぼっていた。

下腹部から湧き上がってきた感覚、それは――。  
(う、く……駄目、漏れる。漏れちゃう……)

降りしきる雨が全身を濡らす。辺りの気温は急激に冷えていた。体内からは熱気が溢れ出ているというのに、体外は冷やされる。その上、張り型によって圧迫される下腹部。そのような悪条件が重なり合い、少女は嘗てないほどの尿意を感じていた。

(こんな所で。進軍中だぞ。皆が、皆が見ているんだ！)

どこまでが本当か分からないけれど、仲間達の視線を感じる。皆が自分を見ているようだから歯を食い縛る。こんな場所で漏らすということは、自分だけでなく、九流家の名誉

までも穢すことになってしまふ。

だというのに、尿意に耐える為の力が上手く入らない。張り型から与えられる刺激によって、性感のほうも限界に達しようとしていた為だった。

生まれてからこれまで、風花が一度も感じたことのない、不思議な感覚。張り型との結合部から、全身へ広がっていく何か。身体中を甘い痺れが包み込んでいく。総てを忘れて身を任せたくなるほどの肉悦だった。直腸が与えられる刺激によつて痙攣する。張り型で腸壁を擦られる愉悅に、喜びの声を上げているかのようにだった。

だが、残つた理性がそれを拒絶し続ける。流されれば帰つて来れないと、自分自身が警告を発していた。

「はあ、はあはあはあ……、ん、あっんんんっ！」

じゅぶ、ぐぶ、じゅぶるう。

辺りには雨音が響いているというのに、風花の耳にははっきりと淫音が聞こえる。肛門を、人として最も恥ずべき部分を弄る音。共に聞こえてくるのは、カッポカッポという愛馬の足音だった。一定の間隔を置きながら音が耳に届くたび、少女は全身を痙攣させる。震えるたび、白雲はフラフラと左右に揺れた。馬を真つ直ぐ歩かせることすらできない。熱に浮いた視界がぐるぐる回る。共に戦場へと向かう愛馬は、主人の変調に気付いているのか、時折視線をチラチラと向けてきた。自分が主人を苦しめていることに気付いている筈もない。向けられる黒い瞳。何とか白雲を安心させようと、少女武者は頭を撫でる為



手を伸ばす。再び肉奥へと張り型が打ち込まれたのはその時だった。

「——ああつ！ く、来る。何か来る。駄目、駄目駄目駄目駄目駄目えっ！」

フラツと肩が揺れ、少女は落馬しそうになる。

「風花！」

その身体を、いつの間にか近寄って来ていた十兵衛が支えた。少女の様子に、さすがに異様なものを感じたらしい。

「大丈夫か？ お前ちよつと変だぞ」

本当に身を案じてくれている言葉だった。具足の上に添えられる手。籠手だつて着けているというのにとても温かく感じ、心が落ち着く。

（で、でも駄目！）

慌てて体勢を立て直す。

心が折れれば肉体も折れる。十兵衛の前でだけは、情けない姿を見せたくない。

「お前、顔が真っ赤だぞ。熱でもあるのか？」

同僚の時のように、首を振ろうとする。だがその頭を、十兵衛が両手で押さえてきた。馬が止まる。軍列から少し外れてしまった。首を動かすことができないので、視線でその事実を訴えかける。

「後で追いつけば問題ない。それより今はお前だ。本当に大丈夫か？」

彼は事も無げに答えた。真摯な瞳は、風花だけを見つめている。

(ああ、何故この方はこうなのだろう……)

たかが家臣一人の異状。その程度無視したって問題ないだろうに。本当に純粹な人。仇の息子だというのに、どうしても恨むことができない。彼に優しくされるほど、復讐の為にはなんでもすると誓った筈なのに、その心が萎えていく。

(恨めしい。この優しさが、ああ、んんくう……)

そんな優しさを目の前にしても、昂ぶった少女の肉体は収まらない。白雲が止まっているお陰で張り型に突き上げられることはないが、だからといって尿意が消えるわけではなかった。それに、張り型が止まったら止まったで、苦しみが湧いてくる。

(私の、私の身体はどうなってしまったんだ！)

異物を挿入したままの下腹部が疼く。張り型を挿入され拡張した肛門が呼吸するように蠢き、甲胄下の胸が燃えるように熱くなり張り詰める。晒しや胴の締めつけが苦しい。馬に跨った膝が、もじもじと動いた。物足りない。何か足りない。身体が乾いていく気がする。

(ああ、動かしたい。腰を、腰……)

衝動を抑えきれない。本能を押さえつけていた理性が掠れていく。

「おいっ！ どうしたんだ！」

そんな彼女を現実に戻したのは、十兵衛の怒鳴り声だった。

「どうした？ 俺は答えると言っているんだぞ」

言葉と同時に彼の腕が少女の肩へ回り、その全身を揺らす。

じゅぐ、じゅぶじゅぶ……。

「ほおうっ！」

皮肉なことにその動きによって、張り型が少女の内部で蠢いてしまう。途端に襲い来る肉の悦楽。睨が下がった。だらしなく崩れる口元。奇跡的に尿道が決壊しなかったことだけが救いである。

「風花!？」

明らかに異常な家臣の姿に、十兵衛の顔にも焦りが浮かんた。

(だ、め……。若にだけは……)

彼の表情に、風花の心はざわめく。必死の思いで、迫り来る情欲と尿意を押さえ込んだ。

「も、問題、ありません。私は、だいっじ……おっおっおっくう……うぶ、ですから……」

何とか言葉を搾り出す。自分自身でも、こんな言葉で十兵衛を説得できるとは思わなかった。それでも、無理にでも、信じてもらう以外にない。

「こ……こんん、な、ところで、とま、とまっる、わけには……。わ、若は、い、戦場いくさばにたた、立たないと……」

だから私のことは気にしないで。お願いですから気にしないで下さい。視線にだけは意志を込め、十兵衛を真っ直ぐ見つめる。

彼は一度唇を噛み締め、迷うような表情を見せた後「分かった」と一言頷いた。

「ただ、何か本当に異状があるようだったら、必ず俺に言うんだ。病人を戦場に出すわけにはいかないからな」

「わ、分かってま……す」

「よし！ では軍列に戻るぞ……。結構離れちまったから、急ぐぞ」

赤沼家の、その中でも特に花村備前の進軍速度は速いことで知られている。馬を走らせなければ、もとの位置には戻れない。

(馬を走らせる……)

想像すると、絶望感が広がった。

現状で白雲を走らせ、それに私は耐えられるだろうか？ という恐怖。だからといって、走らせないわけにもいかない。ここで動けなければ、それこそ戦から外されてしまう。

(それだけは駄目！)

赤沼家に仕官して以来、幾度も凰花は戦場に立ってきた。ただ、それらの戦は偵察からの遭遇戦といった小さなものばかり。今回のような大規模な戦は初めてのことである。武功を上げる最大の好機なのだ。

「行くぞ！」

凰花の迷いを知らない十兵衛は、一人馬を走らせる。

(……行くしかない。弾正を殺す。殺す為だ！)

迷っている時間などない。決意と共に、馬の脇腹を蹴った。

白雲は嘶き、主人を乗せて走り出した。後ろ足が力強く地面を蹴り出す。馬体が僅かに宙を舞い、そして前足から着地した。

ずじゆぶつ！

「んあひいつ！」

肛門から走る、全身を引き裂くような刺激。情けない悲鳴を上げる。

それでも馬を止めることは許されない。前方を十兵衛が走っているのだ。彼に置いていかれるわけにはいかない。だから更に馬速を上げていく。

「たひつ！ たえつる！ わたしは、たへ、たへつるのおおつ！」

バチユンツバチユンツバチユンツ！

馬の跳躍に合わせるように、腰が浮き沈みする。白い尻が鞍に叩きつけられ、湿り気混じりの音が響き渡った。腸液や雨で濡れた臀部が、赤く染まっていく。

「いぎついぎつ、いぎいいいつ！」

尻を一打ちされるごとに、頭や全身が痺れた。身体の内側に突き入れられる張り型で、膀胱が破裂しそうなほど圧迫される。ともすれば指先からも力が抜けそうだった。

「んひつ！ あ、あつあつあつ、ふあつ！」

それでも手綱だけは放すまいとがく。

（死ぬ！ あつ、私。こんな、こんな所で、こんな所で死んじゃうっ！）

思考が焼き切れそうだった。視界が真っ白になり、総てのものが消えていく。



主人の身に起きる変化は、愛馬にも容易に伝わった。泥濘に足を取られ、一瞬倒れそうになる。それでも白雲は風花を落とすまいと、本能的に体勢を立て直し――、

ず、ずじゅっ、みじゅっ！

「おっ、おとおおっ……おひいいいっ！」

主人に止めを刺した。

軍列に丁度追いついた時のことである。

根元まで深々と突き刺さった張り型。風花の瞳が白目を剥く。張り型が腸粘膜を擦り上げ、硬い棒が直腸を限界以上に押し広げる。下腹部にこれまで以上の刺激が叩きつけられた。肛門から身体を二つに割り裂かれてしまうのでは、というほど衝撃は強く、目の前が真っ白になる。身中から湧き上がってくる肉悦が、小柄な身体を押し包む。総ての思考がその何かの中に溶けていくような気がした。全身から力が抜ける。

「あひっ、あひっ、もお、もほお！」

震える腰。背中が弓形に反り返り、舌がピンッと伸びた。張り型を啜え込む肛門が収縮する。

プシュッ！ プシャアアアッ！

圧力で噴き出す夥しい量の腸液。袴を汚し、鞆を濡らす。液体は袴の中を伝い、少女の爪先まで流れていく。

「おあっ、むひいいいいいっ！」

はしたない言葉を口に出す自分が悲しいが、どうすることもできない。菊座に肉槍を密着させていた足軽は、そんな彼女の姿により肉棒を硬くしながら、腸内挿入を開始する。

みぢゆ、みぢゆぢゆう。

ただでさえ指で拡張されていた穴が大きく押し開かれていく。薄い肉壁を隔てて挿入される二本の陵辱棒。互いに圧迫される穴に、よりはつきりと剛直が埋め込まれた。

「うおひいつ！ あなつがあつ！ わた、わたっしの、あ、ああああ、ながあつ！」

肉棒で身体が挟まれているかのよう。少女は何度も幸福感に身を震わせた。男根の硬さと熱が、膈壁、腸壁と溶け合い、混ざり合う。媚肉を拡張される肉悦に、ヒクヒク震える足先から指先。再びの絶頂だった。

「さあいくぞ！」

そんな状態で男達は腰を振り始める。

じゅぽっじゅぽっ、じゅるぽおっ！

二本の肉棒は交互に動いた。一本が肉奥を突いたかと思えば、もう一本が引き抜かれる。挟まれた肉壁が擦り上げられ、身体中を甘い快楽で包み込む。身を襲う肉悦に、視界がチカチカと激しく明滅した。

「ふうああっ！ うごっ、うごひてるう！ おうっおうっ！ な、なっかで、ほおおおっ！ ご、ごりごりっつて、ごりごりっつて、わったしが、けず、削られるうっ！」

休む時間を与えない波状攻撃に、凰花の背が反り返る。が、すぐに全身から力が抜け、

下になっている男の胸に上半身が倒れそうになってしまふ。

「おっと！」

男の一人が結った髪を掴む。お陰で倒れかけていた身体は止まった。

「んふあああ……」

丁度口の前に、肉棒が晒される。髪を掴んでいる雑兵の大きく反った男根。見た途端、

「んもおっ！」

ぶちゅくう。

それを啜えた。まったく反射的な行動。目の前に肉棒がある。だから食べたい。などと考えることすらなかった。今の少女にとって眼前の肉槍を啜えるという行動は、呼吸をずるようなものだったのかも知れない。

(何故だ。何故私は……)

そんな自分自身に対して戸惑いも覚えるが、口腔に広がる肉の味に瞳が細まる。自分がこれまで食してきたどんなものより、小汚い勃起は美味しく感じられた。

「んぢゅっ！ んおぢゅっ！ おいひい！ にくほうおいひい！」

舌を肉洞に絡みつかせ、頬を窄めて吸っている間も、下腹部への蹂躪は止まることを知らない。それどころか、より激しく振られたくられる。男根は一突きごとに、大きき、硬き、熱を増していった。腰が叩きつけられるたびに、射精へと近づいていく。それが凰花には堪らなく嬉しい。

思い出すのはあの熱液の感触。どぼどぼと肉孔に注がれ、膣内を押し包み、下腹部から全身へと幸福の悦楽を広げていくもの。だから流し込んで欲しい。膣中を満たされれば満たされるほど、弾正殺しにも近づける。だから下さい。いっぱい流し込んで下さい。

確かに風花は三日三晩の陵辱に耐え抜いたけれど、確実に心は蝕まれていた。

「すげえ上手いぞ。一体これまで何本啜え込んだんだあ？」

口奉仕を受ける男が、愉悦の声を上げる。同時に仰向けになって、膣に肉棒を挿入していた男が上体を起こす。腕を伸ばし、勃起した乳首を指で挟んできた。そのまま引き千切らんばかりに引っ張ってくる。ぐりぐりと捏ね繰り回す指の動きに、乳房が引き攣るように痙攣する。

「んおっ！ くひっ！ ち、ちつくびがあ！」

口腔に広がる濃厚な臭気を嗅ぎながら、甘い叫び声を上げた。肉体はイキッ放しといつてもいいほど、常に絶頂状態にある。蜜壺からは小便のように愛液が垂れ流れるほど。それでも牡汁を流し込んでもらわなければ、満足など到底できるものではない。だから求める。口に肉棒を啜えたまま、くぐもった声で男達に射精を懇願した。

「っち、どこまでも淫乱な女だ。仕方ねえ。おい、お前ら、こいつにくれてやるぞ！」

地面に横になった首領格の男が告げる。すると少女の三つの穴を陵辱する腰の速度が上がった。摩擦熱でそれぞれの穴が擦り切れそうなほどの勢いで、下腹部と顔に叩きつけられる。

じゅっばじゅっば、じゅっばおっ！

鼻が男の腰に潰された。食道まで貫かんばかりに口腔に差し込まれる肉槍で、嘔吐感まで込み上げてくる。粘膜に覆われた亀頭の感触が、喉奥から直接伝わってきた。肉先が口腔と一体化する。苦しさと涙が流れそうになるが、その感覚にまで愉悦を感じた。

「んごっ、んごっごっごっごっ！ ぶえっ、ふげえっ！」

三本の肉棒。それぞれの亀頭が膨れ上がる。湧き上がる熱。鉄のように肉茎が硬くなった。そして――。

どぶっ！ どぶどぶどぶどぶ！ どっびゅ、どびゅどびゅ、どっびゆるるうううっ！  
激しく痙攣しながら、一斉に白濁液を少女の肉孔目掛けて噴射した。

「んぼっ！ んんんお、おおおお……。こもおおおおっ！」

口腔が熱液に沈む。凄まじい勢いで射精されたそれは、喉奥から直接食道へと注ぎ込まれた。粘液で喉を塞がれ、詰まる息。

「こひっ、んひゅええええっ！」

直腸にも注ぎ込まれる。排泄器官を逆流してくる熱液で、腸壁が火傷しそうになった。更には膣中。子宮口に密着した状況から、直接子種が流し込まれた。下腹部に陵辱液が満ち満ちる。

「おごっ！ ほひっ、ひうぐっ！ おうっ、おうう……。んっもおおおおっ！」

身体中を包み込む熱。匂い。絶頂に至っていた肉体が、更なる高みへと押し上げられて

いく。瞳は完全に白目を剥き、一瞬で意識まで持っていかれた。全身をとてつもない幸福感が包み込む。

「おいおい、ぼうつとしてるんじゃねえよ」

朦朧とする意識の中、男達の笑う声がとても遠くに聞こえた。

ずじゅぶう……。

呆然としたまま、肉棒を引き抜かれた。唇も、肉襞も腸壁も、総て外側に捲れ上がる。その様はあまりにも醜い。

「お……つかは！ おえ、おげえつ……お……あ……あ……ああ……」

口腔から吐き出される、飲み込みきれなかった白濁液。肉棒が抜かれた膣、尻、両穴からも、牡汁が漏れ出た。

潰された蛙のような姿。ヒクッヒクッと時折肉体が痙攣するのが痛々しい。それでも、白濁塗れになり白目を剥いた間抜けな表情が、どことなく幸せそうに見えた。

「いい顔してるじゃねえか。でも、まだ終わりじゃねえぞ」

少女には意識を失っている暇すら与えられない……。

「お……あひつ！ あっあつ、あーあー！」

小柄な身体を抱えられた状態で、膣を、尻を犯されていた。二人の男に挟まれた少女は、狂ったように嬌声を上げ続ける。肉棒で突き上げられるたびに、ガクガク身体が揺れた。



この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**